

第 46 回全国大会シンポジウム概要

テーマ レトリックの眼で見た世界—虚偽・悪文・映画・判決—

趣旨

柳澤浩哉(広島大学)

レトリックを方法・視点として使用した新しい研究事例を提示する。これが本シンポジウムの課題である。新しい挑戦であるだけに、各パネリストには、それぞれの専門分野から離れた発表をお願いすることになった。

認知言語学の森雄一氏には悪文についての考察をお願いした。悪文の中から「不整合構文」を取り上げ、認知的な観点を主にしながら、従来にない多角的な分析を提示いただく。

レトリックの香西秀信氏には虚偽を生産的に解釈する試みをお願いした。虚偽論から人間の思考の癖をあぶり出していく興味深い提案である。

司会兼任の柳澤は、映画において虚偽・悪文がどんな演出道具として利用されているか、その事例を映画のDVDを上映しながら紹介する。

法哲学の平野敏彦氏には、判決文のレトリックという今日的な問題をお願いした。プロの裁判官も無意識のうちにレトリックに動かされている。その実例を、実際の判決文から洗い出していく刺激的な試みである。

本シンポジウムは、一つの解答に到達できるという性格のものではないが、それぞれの発表の中に多くの刺激とアイディアがあると思う。21世紀の表現学を模索するための捨石になることを期待している。

困難な依頼をご快諾くださったパネリスト各位に感謝を申し上げたい。

各パネリストの観点

悪文のレトリック

森雄一(成蹊大学 認知言語学)

岩淵悦太郎編著『悪文』、永野賢著『悪文の自己診断と治療の実際』、中村明著『悪文』……。悪文論の名著でとりあげられている具体例と分析は本当に面白く、今後のレトリック研究にも大きな示唆を与えてくれます。

今回の発題では、上の悪文論でとられている視座を受け継ぎ、悪文を「ジャンルのずれからの不具合」と「日本語としての誤り・不明瞭さ」に大きく分けた上で、両方の要素を持つ個別事象として「不整合構文」を主に取り上げたいと思います。「不整合構文」は、文法論的にも面白い課題であり、また、発題者の専門である認知言語学の観点から見ても興味深い素材です。

多様なアプローチが可能であるため、認知的な方法を中心としながらも、そのみにしぼられない観点が提示できたらと考えています。